

教育相談センターにおける相談活動についての一考察

－平成5年から平成11年までの7年間の歩み－

a study for counseling activity in the education counseling center

－ From the practical study of 7 years from 1993 to 1999 －

藤 土 圭 三

Keiso Fujito

は じ め に

1993年4月、広島文教女子大学付属教育相談センターに相談担当（兼務）として勤務するようになって7年が経過した。本研究は、7年間の相談活動を検討し、今後の相談活動の在り方について、対応事例を中心に考察・検討することを目的とする。筆者は1993年3月31日まで、山口大学教育学部に勤務していたが、同年4月1日より広島文教女子大学文学部初等教育学科に勤務するようになった。兼務の形で教育相談センター相談担当を引き受けた。爾来7年間、学部・大学院での授業と研究指導を担当しながら、並行的に来談者の相談に応じてきた。7年間の総実件数は150件、延べ面接回数、967回となった。ここでは7年間に対応してきた事例を検討し、臨床心理学的接近法による治療効果とその限界について検討するを目的とする。

年度別来談者数・相談内容・面談回数についての検討

(1) 平成5年度

Table 1 平成5年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例A 1	自殺未遂	10
事例A 2	生活・性格	19
事例A 3	自殺未遂	20
事例A 4	夫婦関係	5
事例A 5	非行	1
事例A 6	異文化問題	1
事例A 7	信仰問題	1
事例A 8	非行	3
事例A 9	性格問題	1
事例A10	性格問題	1
事例A11	性格問題	4
11 件		延べ61回

平成5年度は赴任した年であり、授業と研究指導に専念してきたが、平成5年度には11名の来談者を迎えた。Table 1に示すよう到来談者の内、事例A 3は自殺未遂で来談した。A 3の指導には

3年間に要したが、現在は安定し、福祉専門職者として活躍中である。A3との面接回数は50数回に及んだ。事例A1の場合は自殺を何度も繰り返す事例で、在宅のままの指導が困難となり、精神科に一時入院した。現在では、健康を回復し、仕事に復帰した。事例A2はこれという症状があって来談したのではなく、職場における対人関係の調整を求めている来談であった。初めは対人関係上の問題として面接を開始したが、面接が深まるにつれて、A2自身の性格上の課題がテーマとなり、2年越しの継続的面接となった。結果として、性格上の課題を解決することができた。更に事例A4は夫婦関係上の課題があつての相談であったが、面接が進行するに連れて、来談者の生き立ち、生育が大きな課題となって意識化された。爾来、5年間に渡る継続面接が行われた。現在は比較的稳定した家庭生活が行われるようになっている。来談者の訴えとして、生活（性格）上の問題が多い。例えば、わがままである、落ち着きがない、自己中心的であるなどである。性格課題の解決は性格を変更するのではなく、それを如何に生かすかにある。この課題は言うにして易く、行うに難しである。年間案件数11件、延べ面接回数61回に及んだ。

(2) 平成6年度

Table2-1 平成6年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例A2	生活・性格	21
事例A3	自殺未遂	31
事例A4	夫婦関係	4
事例B1	生活問題	20
事例B2	異性問題	25
事例B3	家族問題	16
事例B4	思春期危機	29
事例B5	精神病疑い	6
事例B6	不登校	2
事例B7	摂食障害	1
事例B8	親子関係係	1

Table2-2 平成6年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例B9	対人関係	2
事例B10	異性問題	1
事例B11	異性問題	1
事例B12	対人関係	2
事例B13	生活問題	1
事例B14	生活問題	1
事例B15	不安状態	1
事例B16	異性問題	1
事例B17	強迫症状	1
事例B18	不本意入学	1
事例B19	不登校	1

Table2-3 平成6年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例B20	夫婦関係	1
事例B21	不登校	1
事例B22	不登校	1
事例B23	無気力	1
事例B24	自殺未遂	1
事例B25	性格問題	1
事例B26	対人関係	1
事例B27	対人関係	1
事例B28	対人関係	1
事例B29	精神病疑い	1
事例B30	ホスピス	1
33件		延べ183回

平成6年度の来談者は33名であった。平成5年度に比較して、来談者の増加を見た。平成6年度の来談者数は7年間の中で最も多かった。平成6年度が特別多かった理由は定かでないが、この年度、教育相談センターの専任カウンセラーが地域に対し相談センターのPRを試みた結果からかも知れない。来談者の特徴分析を行って見ても明らかであるが、担当カウンセラーにとっては回数のかさむ事例が印象深いし、来談者の心理的重荷も大きいことが理解できる。今一つ気づくことは、精神科的症状は示されないが、深いこだわりを潜在化している来談者が多く来談した。前年からの継続となった事例A2は専門職者であり、仕事を継続しながらの面接であった。性格的には完全性、徹底性の強いところがあり、それが職場における対人関係上の軋轢となり、これが面接継続の動機付けとなった。面接は平成9年まで継続した。A2との継続的面接は、A2の深層心理に接近し、面接も充実したものとなった。平成6年度の来談事例の中で、担当カウンセラーとして最も注目したのは事例A3である。A3は自殺未遂（リスト・カット）で来談した。面接継続中も何度かリスト・カットがあり、その抑制が必要となり、かかりつけの病院に入院することもあった。症状の悪化した時には入院して、急場をしのぎ、症状が落ち着いたら、通院するという方法で、面接を継続した。A3との面接は平成6年中に集中した。高校を卒業し、福祉関係の専門教育を受けて、福祉関係の仕事についている。

事例A4の相談は、自分の指導する子供の生徒指導上の問題についての相談であった。間接的な課題（指導中の子供の指導と言う）による面接契約であったが、面接が進むに連れて、子供指導の問題からA4自身の生い立ち、性格・行動上の問題の相談となり、今日に及んでいる。A4は自分の課題に直面できない状況から、指導中の子供の問題を面接のための手札として利用したのであろう。A4はその後、数年に渡って面接を継続した。A4は加齢期にあり、加齢期の生き方を面接を通して再検討中である。

事例B1は事例A4とある意味で類似した事例である。事例B1はライフサイクル上の課題と言ってもよい問題で来談し、平成6年度中に20回の面接をした。平成7年度になると面接回数が自然に減少し、来談動機が逓減し、契約面接は終焉を迎えた。事例B1は管理職として活躍中である。事例B2は高校生の恋愛を両親が受容するための軋みに耐えかねての面接であった。将に子供と親の価値観の葛藤であり、折り合いが付くまでに15回の面接を必要とした。結果としては保護者が子供の価値観に添った形で終焉を迎えた。事例B3は大学休学中の事例で、家族間葛藤が深く、休学から退学になり、面接も終了した。現在は、家族から離れて、独立した生活しているとのことである。事例B4は平成6年度から面接契約を結び、来談者の課題解決に参画した。爾来、多彩な症状を示し、危機的状況もあり、予想を裏切るような事象にも遭遇したが、何とか乗り気って、平成10年には、比較的安定し、平穏な日々を送っている。事例B5は面接回数は僅かであったが、管理能力のない、薬をもたない外来中心の相談機関での対応に限界を感じる事例であった。結局、入院施設のある専門病院へ入院した。平成6年度は面接回数が1回ないし2回程度の面接が多かった。相談内

容では不登校、対人関係、異性問題、生活（性格）問題などの相談が多かった。これらの相談のうち、不登校は時代的変遷の中で発生した新しい心理的問題で、内的過程の多彩な症候群であり、一義的には論じることのできない問題である。不登校は予約システムを取る相談機関では、継続的な面接が行われにくい状況にある。その第一は来談者自身が契約した時刻に来談するという動機付けが低いことである。来談者自身が課題を何とかしたいとか、何とかしなくてはならないという感じが少なく、来談者自身が変化しようという意欲に乏しく、時に流される傾向が強い傾向にある。第二には、豊穡な社会で日々生活する子供達は、励んで努力して、頑張らなくては生きて行けないという切迫感が少なく、その日、その日が生活出来れば良いではないかと感じているのかも知れない。煩わしい人間関係に積極的に対処するよりは、避けることで、その場を切り抜けようとする感じである。学校教育にとって、豊穡社会は益する（追い風）ものとはならないのかも知れない。この意味からしても、学校は大きく変革しなくてはならないのだろう。しかし、現実にはその変革は進まない。一番の変革抵抗は教師側にあるのではあるまいか。不登校中の子供の心性の中にこそ、これからの教育にとって、示唆に富んだものがある。「今時の子供は」と言う言葉で、批判するのではなく、何故、この様な事態になるのかを考えることが求められている。不登校の子供達は対人関係を避けることで我が身を護っているとも言える。とは言え不登校への対応の場合に注意すべき留意点がある。(1)不登校はその行動が学校に行かない行動なので、保護者や関係者にとっては理解できない行動かもしれないが、本人からは「逃れたい、避けたい」行動である。それでは逃れたい、避けたい対象を除けば登校が可能となるかと言えば、そうではない。(2)不登校は子供の行動の一部であり、多彩な要因が関係し、一対一対応で解決できるものではない。基本的には学校を使わないで生活を考える、家に立て籠ることで生活が立てられないか、までも含めて、不登校を考える必要を感じる。(3)兎にも角にも、不登校が登校に変われば良いではないかとか、子供が登校するようになれば、問題は解決したと言う考え方もあるが、不登校対応の基本的対応方法は、不登校児が新しい生き方を創造するのを援助することである。生き方を創造する過程において登校が必要だということになれば、登校が再開することもある。(4)不登校現象の中には重篤な疾患の一症状である場合がある。重篤な疾患のあるなしについての診断的関心を欠いではない。(5)基本的に、学校環境が全ての子供にとって、自己の発達支援を受ける国家的機関であるとするならば、どんな類の子供でも学校にだけは行こう、行きたいと言う気持ちを持てるような学校環境・機能が用意される必要があるのではあるまいか。

相談内容として異性問題（関係）があったが、これは夫婦関係の問題も含めて、異質との交流の在り方を問うものとして、これからの社会における大きな課題となるのではあるまいか。従来の異性（夫婦）関係は多くの場合、男性が女性に対して支配的であり、女性が服従的關係を求められてきた。しかし、これからの社会では、一方が他方を支配するのではなく、両者は相互に理解しあい、協力しあう関係を形成しなくてはならない。それは共生関係であり、歯車関係である。相手の長所

とこちらの長所を上手く組み合わせることであり、それを工夫し創造することである。

異質と異質との交流である男女関係こそ、歯車関係の原型で、歯車関係を形成する具体的方法は徹底した話し合いであり、伝え合いである。一方が他方を言い負かすのでもなく、言いくるめるものでもない、解り合う関係を創造することではあるまいか。相談内容としての生活（性格）問題はいずれも人生後半にある女性からの相談である。長寿を手にした現代女性の新たな課題である。人生後半を如何に生きるかの課題である。これは平均余命80年を手にした現代人の新たな課題であり、その多くが女性の課題として訴えられるところに時代的反映と考える。

(3) 平成7年度

Table 3-1 平成7年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例A 2	生活・性格問題	3
事例A 3	自殺未遂	3
事例A 4	夫婦問題	11
事例B 1	生活問題	6
事例B 3	家族問題	4
事例B 4	思春期危機	31
事例B 5	精神病疑い	3
事例B30	ホスピス	21
事例C 1	精神病疑い	1
事例C 2	A L S	2

Table 3-2 平成7年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例C 3	対人関係	1
事例C 4	不登校	2
事例C 5	対人関係	2
事例C 6	精神病疑い	7
事例C 7	親子関係	3
事例C 8	性格問題	1
事例C 9	強迫神経症	4
事例C10	進路相談	10
事例C11	性格問題	4
事例C12	精神病疑い	2
20件		延べ155回

平成7年度は前年度の3分の2の相談件数である。延べ面接回数も155回となった。相談内容について検討しよう。前年度から引き続いた事例が8件あり、新規の事例は13件となった。前年から引き継いだ8件はいずれも深刻な問題を潜在化している事例と推察される。中でも事例B30は癌患者とその家族の事例で、カウンセリングとホスピスとの関連性を研究するために、近くの公立病院から紹介をうけて面接した事例である。B30は20回の面接で死亡した。続いてその妻との面接を継続し、平成10年までの断続的面接経過を体験し、検討した。定年とはほぼ同時期に発病した夫は入院して、化学療法・放射線療法などの治療を受けたが、面接20回、面接期間6か月で他界された。その後引き続いて、残された妻の喪の儀式に参加し、今日までの3年間、妻の心の変遷に添ってきた。詳しくは広島文教女子大学紀要第32号、1998年に譲る。

事例C 2は筋無力症であり、3回目の面接を予定していたが、症状が急に悪化し、面接出来ないままに他界された。27才の若い人生であった。C 2は技能職者として、元気で働いていたが、急に手に力が入らなくなり、医師の診察を受けたところA L Sと診断され、治療を受けたが、治療効果が得られず、自宅療養となった。自宅では人工呼吸器を装置しての生活であった。不明瞭な言葉は

残っていたものの、全身が制御不能となり、痒いところも自分では搔くこともできないし、寝具を引き上げたり引き下げたりも出来ないと言う完全寝たきり状態であった。ベットサイドで、母親の援助を得ながらの面接であったが、2回の面接で面接不能となった。事例C4は一人子であったが、不登校となり、紹介されて父母が一回ずつ来談した。夫婦は共に専門性の高い仕事を持ち、勤務時間も不規則で、環境的に多くの問題を潜在化していたが、他地域に生活する父方の祖父母に子供の養育をゆだねるという方法で、不登校に対処され、治療関係も形成されないままで中止となった。しかし、その事例内容は如何にも現代的であり、啓示に富むものであった。

事例C10は初めは進路相談であったが、面接が進むにつれて、家族関係が大きく台頭し家族関係の調整のための面接への変化した。紆余屈折はあったが、面接場面で、思いを発散することが大きく寄与したのであろうか、無事卒業し就職した。就職先は親から離れた他地域への就職であった。平成5年度の相談開始以来、予約中心の相談活動にも何名かの精神病疑い（精神分裂病・自殺未遂を含めて）の来談者を見る。契約による相談活動では、自我障害の激しい精神病を疑われる来談者の対応には、より精緻な面接計画とその工夫が必要となる。健康な自我が少しでも機能するか、しっかりした補助自我機能（保護者など）が期待されないと、予約中心の相談活動は機能しにくいのが実状である。思春期・青年期の来談者の多い心理相談活動（カウンセラーの相談活動）では、自殺未遂の来談者が比較的多い。自殺を行い、緊急措置として医師の援助を得て命を取り留めて、精神科に通院するようになって暫くして、心理相談に注目されるようになる。自殺未遂の場合は、初めは各種の診療科から精神科に紹介されて、治療を受けて後に、心理相談に契約した来談者の方が継続面接の可能性が高くなる。逆の場合には、命の問題があるので、心理相談では精神科や近接領域の医師に対応を依頼した方が効果的である。保護機能を持たない心理相談活動では、かけがえのない命のかかわる場合には、相当の注意を必要とする。この意味でも精神科医師と密接な連携を取りながらの面接契約が必要である。具体的には「精神科医師との連携を条件に来談者との面接契約を結ぶことが大切」と思う。心理相談だけでは、自殺未遂の来談者とは面接契約を結ばないようにしている。精神疾患の場合も事態は同様である。妄想があったり、各種の念慮のある来談者の場合にも精神科医師と連携し、医師との協力の元で面接活動を行うようにしたい。特に心理相談では、来談者を保護する権限や制御することは出来ないし、むしろしないことに特徴があり、利点があることを忘れないようにしたい。あくまでも来談者とその関係者と相談担当者との契約関係から始まり、その関係の中で治療活動が行われ、その関係の中で終結を迎える。力量以上のことも以下のこともしないことが大切である。研究や前進のために力量以上のことに踏み込むためには来談者の了解を得ることが肝要であるし、研究協力者のスーパーヴァイズを受けながら、実行するという用意周到さが必要である。

(4) 平成8年度

Table 4-1 平成8年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例 A 2	生活・性格問題	2
事例 A 4	夫婦問題	3
事例 B 4	思春期危機	39
事例 B 30	ホスピス	8
事例 C 9	強迫行動	1
事例 D 1	精神病疑い	1
事例 D 2	自殺未遂	1
事例 D 3	精神病疑い	2
事例 D 4	無気力	4
事例 D 5	ホスピス	1
事例 D 6	うつ状態	6
事例 D 7	非行	1
事例 D 8	非行	1

Table 4-2 平成8年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例 D 9	非行	1
事例 D 10	自殺未遂	3
事例 D 11	対人関係	1
事例 D 12	心身症	1
事例 D 13	自殺未遂	1
事例 D 14	ホスピス	2
事例 D 15	不登校	6
事例 D 16	拒食	4
事例 D 17	対人関係	1
事例 D 18	自己臭	6
事例 D 19	不登校	24
事例 D 20	抜毛症	22
事例 D 21	性異常	6
26件		延べ148回

平成8年度は来談者数26名、延べ面接回数148回となった。相談内容について検討しよう。前年度から引き続いた事例が4件あり、新規の事例は22件となった。前年から引き継いだ4件はいずれも深刻な問題を抱えている。中でも事例B30は癌患者の死亡後のその家族の事例で、カウンセリングの接近がホスピスと関係づけることができるかどうかの事例である。事例B30は20回の面接で患者自身は死亡したが、その後も妻との面接を継続し、平成10年まで断続的面接経過を体験した。本事例は平成11年末にこれからの新しい生活を目論んで子供達が働く地方に転居した。

平成8年度の相談事例からは自己臭のD18と抜毛症のD22を検討したい。D18は女子青年の来談者である。体臭が気になると訴えて来談する。始めの数回は相当深刻な自己臭を訴え続けたが、4回目当たりから事態は急変し異性交流の話に変わり、異性との交流が復元できたと言うことで、自己臭も急に気にならなくなりました。自己臭は精神病的には重篤な精神病理を予想するが、本事例の場合には、予想に反し、異性との交流がスムーズになるにつれて、軽快した。本事例の来談者の場合、異性との軋轢が自己臭と言う形で症状化した感じである。面接回数も6回と少なく、短期間で軽快した。本事例と対応して感じたことは、在来の専門書では予想されなかったようなことが起こりうると言うことであった。育ちと生活様態が大きく変化した今日では、何が起こるか予想も出来ないと言うことではないだろうか。初回面接に受けたすさまじいばかりの深刻な顔付き表情が僅か数回の面接で、手のひらを返したように変化するという現実と直面し、返す言葉もなかった。抜毛を主訴に来談したD22は、精神科医師から近い相談機関へと言うことで紹介された事例であった。女子児童期の来談者であった。両親共に教育者であった。22回の面接と遊戯療法で症状は軽快した。本事例は両親が教育者であり、両親の願いとして出来れば進学中心校に入学させたいと

言う願望があり、それがストレスサーとなって、心身症状をみたものとする。幸い、来談者と遊戯療法担当者との交流が適切であったことと、保護者を担当した心理カウンセラーとのカウンセリング関係効果とあいまって、症状は軽快した。約7カ月の日時を必要とした。

(5) 平成9年度

Table 5 平成9年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例 A 1	生活問題	2
事例 A 4	家族関係	1
事例 B 4	思春期危機	27
事例 D19	不登校	18
事例 D20	抜毛症	5
事例 E 1	夫婦関係	20
事例 E 2	進路相談	5
事例 E 3	不登校	7
事例 E 4	性格問題	1
事例 E 5	性格問題	1
事例 E 6	性格問題	1
事例 E 7	生活問題	1
事例 E 8	心身症	6
事例 E 9	精神病の疑い	1
事例 E10	生活問題	2
事例 E11	心身症	10
16件		延べ108回

平成9年度は、来談者数16名、延べ面接回数108回となった。平成8年度の来談者数26名に比較すると、来談者数が減少したが、延べ面接回数は平成9年度が108回に対し平成8年度の延べ面接回数は148回と実件数の差に比較して、面接回数の差は少ない。

事例 B 4 は、長期の治療面接を継続してきた事例である。平成9年度は27回の面接で対応した。面接回数が少ないのは B 4 が安定していることを暗示している。

事例 E 1 は、夫婦関係調整のための相談であった。始め妻が、後に夫が相談を求め来談したが、調整は困難であった。今日も時折電話があり、来談することもある。事態は一進一退である。

事例 E11は消化器系疾患で入院中の患者である。心理的問題があるために面接を実施した。家庭の問題と夫婦関係の問題を中心に面接した。疾病の軽快で退院し、暫く通院した。通院中も面接を継続した。特異な夫婦関係が事例の疾患に大きく影を落としていた。

事例 D19は高校生、進学コースにあって、勉学に励んでいたが、理科系の教師から、その勉学の不出来を強く注意されたことがきっかけとなって、不登校を始めた。始めは登校する日もあり、程なく登校するようになると担任教師は考えて、何度が積極的に登校を勧めたが、日増しに不登校日が増加したので、心理カウンセラーが担当するようになった。

相談面接を契約し、定期面接に導入したところ、予定日には時刻通りに来談したが、再登校の兆しはなく、家庭での生活に定着した感じが漂いはじめた。再登校が軌道に乗らないと見たカウンセラーはアルバイトを提案し、担任教師とも相談し、アルバイトを勧めたところ、自分でアルバイト先を探し、一般には希望されないようなアルバイトを見つけ従事した。約10か月もアルバイトを続け、生活リズムも定着し、面接時の話題も多彩であった。新学期が近くなったので、登校について相談したところ、留年が障りとなって、退学を希望し、両親を交えて相談して、退学することになった。しかし、相談面接は定期的に継続した。高校を辞めた後をどのようにするかということについて、話し合ったが、両親が働いているので家事を担当するということになった。その間、アルバイトで蓄えた資金で自動車免許に挑戦し、普通自動車免許を取得した。来談者は高校こそ退学したが、控えめな、落ち着いた青年として、生活を続けている。

(6) 平成10年度

Table 6-1 平成10年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例A 4	家族問題	11
事例B 4	思春期危機	57
事例D19	不登校・退学	28
事例E 1	夫婦関係	30
事例F 1	進路相談	5
事例F 2	夫婦関係	3
事例F 3	精神病疑い	1
事例F 4	性格問題	5
事例F 5	性格問題	3
事例F 6	不安神経症	15
事例F 7	精神病疑い	1
事例F 8	非行	2
事例F 9	育児相談	2

Table 6-2 平成10年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例F 10	性格問題	4
事例F 11	精神病疑い	1
事例F 12	うつ状態	1
事例F 13	性格問題	5
事例F 14	精神病疑い	1
事例F 15	精神病疑い	1
事例F 16	生活相談	1
事例F 17	性格問題	2
事例F 18	性格問題	2
事例F 19	夫婦関係	5
事例F 20	性格問題	1
事例F 21	意欲減退	11
25件		延べ198回

平成10年度は、来談者数25名、延べ面接回数198回となった。平成9年度の来談者数16名に比較すると、来談者数が増加した。延べ面接回数は198回である。来談者数が増加した理由は明確ではないが、増加した。来談者の相談内容は表10に示すようにA 4、B 4、D19、E 1は、前年度からの継続事例であり、特に事例B 4は長期の及ぶ事例である。

事例B 4の面接回数が最多であるが、これに次ぐ長期面接は事例E 1の夫婦関係調整であった。事例B 4はある意味で典型的な精神症状を示す来談者である。事例E 1は夫婦関係調整のための相談であった。最近、夫婦関係調整のための相談が増加の傾向にあるが、これは時代的趨勢とを感じる。夫婦と言うこの複雑で怪奇な人間関係が多く相談機関の大きな相談対象となるであろうことが予想できる。

事例F 6は50歳代の来談者で、有能な管理職者である。激しい不安症状を訴えて、近くの精神科クリニックを受診した。投薬による症状管理を受けながら並行的なカウンセリングを要請されて、来談した。15回にわたって計画的なカウンセリングを実施した。結果、症状発生のきっかけは、激しい仕事と慢性的なストレス状況が引き金となっていたが、その背景には、クライアント自身の生い立ちに大きな意味があった。カウンセリングの結果、ストレスと症状とその関係付けとしての自身の生い立ちとの関係が意識化されて、症状の軽快とともに、生活様式の再編成がなされて、迎えつつある人生後半の生き方の有り様を掴むことができた。

事例F 21は意欲減退症候群での来談である。クライアントは中学校時代に不登校となり、高等学校には受験しないで、大学進学適性検査を受験して資格を得て、大学に受験し入学した。大学進学と共に親元を離れて、進学した。1・2年は何とか授業を受けてきたが、3年生になってからは、激しい意欲減退になり不登校を示すようになり、保護者の要請から面接契約をした。クライアントは始めは面接動機が低かったが、面接が進むにつれて、面接動機も高くなり、1年以上の長期面接を実施した。現在は、意欲減退から解放され、卒業研究に積極的に取り組み、大学院受験を狙っている。

(7) 平成11年11月まで

Table 7-1 平成11年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例B 4	思春期危機	37
事例B30	ホスピス	2
事例D16	拒食	1
事例E 1	夫婦関係	5
事例F 6	不安神経症	1
事例F 14	精神病疑い	1
事例F 21	意欲減退	25
事例G 1	対人関係	1
事例G 2	非行	1
事例G 3	意欲減退	17

平成11年11月現在で集計

Table 7-2 平成11年度来談者数・面接回数

事例名	主 訴	面接回数
事例G 4	夫婦関係	7
事例G 5	精神病疑い	2
事例G 6	不登校	2
事例G 7	精神病疑い	1
事例G 8	自律神経失調症	1
事例G 9	夫婦関係	1
事例G10	夫婦関係	1
事例G11	夫婦関係	2
事例G12	ホスピス	6
19件		延べ114回

平成11年度は11月中旬までの集計である。来談者数19名、延べ面接回数114回となった。平成10年度の来談者数25名に比較すると、来談者数は少ないが、平成11年度末になると、来談者数は昨年並みと予想できる。延べ面接回数は114回である。10月までの来談者の相談内容は表7に示すように、事例B 4、B30、D16、E 1、F 6、F 14、F 21は、前年度からの継続事例である。事例B 4の面接回数が最多であるが、これに次ぐ長期面接は事例F 21の意欲減退であった。事例F 21は典型的な意欲減退症候群にある来談者である。F 21は中学・高校は不登校であったが、大学受験資格取得のための試験に合格し、大学受験資格を獲得後大学に受験して入学した。

最近、夫婦関係調整のための相談が増加の傾向にある。事例E1, G4, G9, G10, G11はすべて夫婦間調整のための相談である。最近急に夫婦間調整のための来談者が増加した。これは時代的趨勢である。夫婦と言う複雑怪奇な人間関係が相談対象となることが予想される。

事例F21は大学受験資格試験に合格して、大学受験をして入学した。大学進学と共に親元を離れて生活するようになり、激しい意欲減退症状を示すようになり、故郷に帰り地元のクリニックに受診し、相談した結果、大学の相談室に紹介されて来談した。面接契約は保護者の要請からであり、来談者自身には高い動機付けはなかったが、面接回数が進むにつれて、面接動機も高くなり、面接に意欲的となり、現在では意欲減退症状は解決し、人生のあり方について検討する状況にある。卒業のために研究もまとまり、締め切り日には論文として提出できる状況になっている。現在は研究に對しても就職活動に對しても意欲的であり、熱心である。

7年間の来談者数・相談内容・面接回数についての検討

(8) 平成5年度から平成11年11月まで

Table 8-1 主訴別来談者集計
「平成5～11年の7年間集計」

主 訴	事例数
生活・性格問題	28
進路問題	3
異文化生活	1
信仰問題	1
対人関係	10
育児相談	1
異性関係	5
家族問題	4
夫婦関係	14
親子関係	2
非行問題	7
不登校	11
不本意入学	1
意欲減退	3
無気力	2

Table 8-2 主訴別来談者集計
「平成5～11年の7年間集計」

主 訴	事例数
思春期危機	6
自殺未遂	8
不安状態	3
強迫症状	3
うつ状態	2
心身症状	3
自律神経失調症	1
自己臭	1
抜毛症	2
摂食障害	3
精神病疑い	17
ASL	1
ホスピス	7
28分類	150回

Table 8-1, 2に示すように、平成5年から平成11年までの7年間の主訴別来談者集計である。7年間の総主訴件数は150件となる。年平均では21件となる。年平均が21件が多いか少ないかの判断は分かれるところであるが、年間21件程度の来談者は、研究的には手頃な件数である。年平均件数が増加すると相談機関としてのサービス機能は充実するが、数をこなすことにエネルギーを取られて、研究的に事例をとらえることができにくい状況となる。この意味で研究的に事例対応を考えるならば、年間21件と言う数は適当な数と言える。具体的には契約した事例はすべて研究的に対応し、面接毎に面接のあり方や接し方について検討し、より効果的な面接技法を検討するには好都合であ

る。とは言え、7年間の主訴別集計傾向を見ると時代を反映するものと、時代を越えて発生するものがある。時代を反映する相談として「夫婦関係問題」がある。最近夫婦関係の葛藤についての相談が増加した。結婚して数年から10年位が経過した夫婦関係に多様な問題を見る。相談内容から推察できることは、お互いの自我の強さ（自己主張の強さ）が葛藤を起こし、夫婦関係の調整を必要とする。来談夫婦の学歴は総じて、高学歴であり、分別盛りの年齢の夫婦である。総じて始めは妻の方から来談し、夫の行動や生活について訴える。妻が何度か来談を継続する内に、今度は夫が来談するようになる。夫の立場を詳細に述べる。両者の見解を詳細に聴取すると、お互いの自己主張のみが顕現化する。

主張のみが顕現化し、両者の主張が咬みあわないし、咬み合わそうと言う方向に向かない状況にある。50歳代の夫婦の場合、夫婦間には子供もあり、第一子は20歳代となり、独立している。第二子も結婚している。このような状況の中でも、夫婦は価値葛藤を起こし、離婚調停中であるとのこと。生育文化の違う男性と女性が共に生活すると言うことは相当の努力を必要とする。従来の家文化の影響力が希薄化してきた今日の家族では、両性間に相当の努力とたゆまぬ積み重ねが求められる感じである。夫が働き妻も自己実現を求めて働く今日では、夫婦の努力なくしては、その関係の継続が困難な状況がある。時代を超えて持ち込まれる相談内容の一つは生活・性格問題である。

これは来談者が生活（性格）する上での悩みごと相談である。人が生きて行く上で、避けて通れない現実に対する対処の問題である。具体的には、人の生活が気にかかる、内気である、人の言うことが気に障る、人が厚かましい、引っ込み思案である、感情の起伏が激しい、気分が優れない、しゃくに障ることが多い、切れることがある、異性が好きで、どうにもならない、子供が反抗的である、夫が相手にしてくれない、子供が思うようにならない、腹が立つ、むかむかするなどである。ここに取り上げたような訴えは程度が進むと、神経症や精神病と命名される場合もある。心の問題は有るか無いかではなく、多いか少ないかの問題である。従って来談者の訴えを生活（性格）問題にするか、神経症や精神病疑いにするかは、程度の問題である。単独の問題で多かった相談は「精神病的疑い」である。精神病疑いの相談は、精神分裂病やうつ病などが疑われた場合で、面接の結果、精神科医師の支援を受ける方が妥当と判断されたものである。精神病の疑いの来談者の場合は一人で来談する場合は少なく、殆どの場合、保護者と同伴で来談する。保護者はある程度は精神病を疑っており、その確認に来談すると言うことが多い。しかも来談者の症状がはっきりしていて、精神病を疑うような奇異な言動があると言うような来談者ではなく、激しい無気力、自閉傾向、神経症反応、心身症状、不可解な行動などを多彩な言動を示す場合が多い。更に一度ならず精神科医師の治療を受けて、症状が軽快し、退院し通院すると言う状況にある来談者も多い。精神病疑いで相談に来る来談者の特徴は、はっきりしない症状が混在する場合と、入院治療後の軽快患者が、来談する場合が多かった。時代を超えて持ち込まれる第二の問題は「人間関係」である。来談者の対人関係は性格問題の裏版とも言えるものであり、若者の来談者が多いことを示唆している。しかし人間関

係上の悩みは人一生の課題であるから、人生の課題であると言ってもよい。心の問題の相談活動にかかわっていると、どんな問題でも常に話題になるものとして人間関係がある。確かに人間関係は来談者の性格特徴を彩るもので、性格形成は人間関係（特に母子関係、親子関係）が大きく参与することは明らかである。来談者が自己の課題を語るとき、面接初期では、来談者は症状や課題を丁寧に述べるが、その症状と課題を述べた後には、その症状や課題がなぜ発生したかを語るようになる。この時には必ず母子関係・親子関係・家族関係の特徴が語られる。来談者が成長するにつれて、職場における人間関係が話題になる場合もある。メンタルヘルスの問題を理解するためには、その背景に深く、複雑な人間関係一般があることを忘れてはならない。メンタルヘルス・性格形成・心理治療の全てに共通してあるものは人間関係であり、その特徴は歯車関係である。ここで言う歯車関係とは、相手の特徴とこちらの特徴を咬み合わせ、組み合わせる工夫をすることである。換言すれば、それは、それぞれの個性を組み合わせ、滑らかに交流できるように工夫することである。個性と個性を組み合わせ、軋みを少なくすることが求められている。

時代と共に増加した相談内容に「不登校」がある。不登校は始めは学校恐怖症として理解され、神経症圏にあった。学校恐怖症が日本で問題となりだしたのは、昭和30年代（1960）であった。朝になると身体症状として、下痢・発熱などが示され、登校が難しくなり、医師の助言も入れて、学校を休むことにする。すると身体的症状は軽快する。本人も明日からは学校に行くという気持ちが強く、教科書を整えたり、衣服をまとめたりして、明日からの登校に備える。しかし翌朝になると再び身体症状が出現すると言う状況が学校恐怖症の初期症状である。結果として、学校を続けて休むようになり、更には自閉的となったり、引きこもりとなり、担任教師が家庭訪問して、本人に会うように希望してもそれを拒否したりする。更に欠席が継続すると、今度は家族（特に母親）に対して攻撃的になったり、家具などに攻撃を加えるようになる。情緒障害を示すような事例もあった。時代に連れて、不登校の内容が大きく変化した。不登校の一部に積極的に学校へ行くことを拒否する子供が出始めた。子供達が身を挺して学校教育に拒否を示し始めたと言ってよいであろう。学校を拒否する子供達のことは教育関係者には歓迎されないかも知れないが登校拒否と言う。登校拒否にもいろいろな水準があり、意識が高く積極的に学校教育を拒否する子供から、はっきりした意識はないが、何となくそれに近い状況で登校拒否を続ける場合もある。いずれにしても不登校の多発は、相談活動だけで、解決できるものではない時代的背景が色濃く影を落としているように思う。昭和20年8月15日、日本は敗戦を迎えた。旧体制は崩壊し、新体制がスタートした。敗戦を迎えた当時の人達は敗戦から立ち上がり、失意のどん底にあった日本人に元気を付けて、復興に努力し、生活にメドがついたのが昭和30年代であった。現実的には少しずつ豊かさを獲得した。生活水準も少しずつ向上してきた。と同時に教育を始めとし、個性を尊重し、個性化こそがこれからの人生目標と言われるようになった。経済的に豊かとなるにつれて、自己主張をする人が増加するし、自己主張を大切にすることが増加し、それが当然のことながら子供達にも汎化した。これに対し学校教育

でも子供の個性化がこれからの教育だと理念的には主張しながらも子供達の要求に当意即妙に対応出来ない状況があり、そこに生まれた軋轢が引き金となって不登校が社会現象化してきたと言えないだろうか。今日、学校現場も大きく変容しつつあると言えよう。ある中学校には教育相談室があって、悩みのある生徒の支援を、不登校室があって、授業には参加できないが、学校には来ることの出来る程度の不登校を支援し、更に学校には来るが、授業には参加したくない生徒のためにはふれあい広場が用意され、彼らの心の友になれるような若いカウンセラーが配置されている。一昔前では考えることすら予想も出来なかった。学校教育担当者も、学校と言う学び舎としての伝統を捨てて、教育相談室・不登校室・ふれあい室・保健室などを用意し、生徒達の欲求に応えようとする。ふれあい室には、学校には来るが授業には参加したくない生徒達が集まると言う。反社会的傾向のある生徒達が集まってくることが予想されるし、現実もそうなっていると言う。不登校の生徒達が身を挺して獲得した施設・支援体制とは言えないだろうか。旧来の教育体制を守ろうとする教師と若き生徒達とのせめぎあいの軋みが不登校現象を通して聞こえてくる感じである。ここで言及したいことは現在の教師が古い教育体制を守ろうとしているのではなく、そうせざるを得ないところに時代の悲劇があり、教師は必死になって、新体制を創造すべく努力中であることも事実である。今暫く待ってほしい、きっと教育は新体制を創世する。

参 考 文 献

- | | | | |
|--------|------|----------------------------------|-------------------------------|
| 高橋 三郎他 | 1995 | DSM-精神疾患の分類と診断の手引き | 医学書院 |
| 山中 康裕他 | 1998 | 病院の心理臨床 4 | 金子書房 |
| 倉光 修 | 1998 | 臨床心理学 5 | 岩波書店 |
| 融 道男他 | 1999 | ICD-10 精神および行動の障害—臨床記述と診断ガイドライン— | 医学書院 |
| 中山美智子 | 1994 | 思春期不登校A子6年間の治療過程 | 心理臨床研究 Vol.12 No.1 P14-24 |
| 田中 康祐 | 1995 | 心理療法過程における「内なる異界との交流」 | 心理臨床研究 Vol.13 No.1 p.85-96 |
| 大石 英史 | 1997 | 「抱え」によるアプローチが関係への依存を誘発した一事例 | 心理臨床研究 Vol.14 No.4 p.436-447 |
| 佐藤 仁美 | 1998 | 「交換コラージュ」を用いた心理療法の試み | 日本芸術療法学会誌 Vol.29 No.1 p.55-63 |
| 佐々木由利子 | 1998 | 絵を次々に持ってきた過食症の女子大学生の事例 | 心理臨床学研究 Vol.16 No.4 p.365-376 |
| 佐々木由利子 | 1998 | 絵を次々に持ってきた過食症の女子大学生の事例 | 心理臨床学研究 Vol.16 No.4 p.365-376 |